

巻頭言

阪神大震災と大阪赤十字病院

大阪赤十字病院院長 内野 治人

平成7年1月17日未明、史上まれな大震災が発生いたしました。その概要について当院医療社会事業部長が手記にまとめているのでご紹介致します。

「災害は忘れた頃にやって来る。」これは物理学者・随筆家である寺田寅彦が言われた言葉である。

淡路島北部を震源とする直下型地震は、兵庫県南部を中心に予想外の広域に及び災害をもたらし、戦後最大の惨事となった。亡くなられた5,420人（2月21日現在）の方々の御冥福をお祈りし、被災者の皆さんに対し衷心よりお見舞いを申し上げます。

被災地にある神戸赤十字病院及び須磨赤十字病院では日赤兵庫県支部と共に、全国赤十字関係の応援を得て、大変困難な環境下において日夜、重症者の受け入れと治療に全力を挙げています。ここからの敬意と感謝の意を表します。

被災地に近い当院では、日本赤十字社より大阪府支部を通じて教護班派遣の要請があり、直ちに医療救護班二個班を現地へ送り、その後も全国からの救護班と共に、連日にわたり、教護所における医療救護及び巡回診療、神戸赤十字病院への救護、医療機器、器材および薬品の供給、神戸赤十字病院入院患者および被災患者の当院への受け入れなど、病院として出来る限りの支援を続けております。

この度の災害救護に際しては、赤十字の一員として、また医療人としての使命感から、

災害を機会に是非ともお役に立ちたいと、職員の中から救護班参加の申し込みが相次ぎ、私共も誠に心強く感じた次第であります。

災害発生以来、院長をはじめ幹部職員と殆ど毎日のごとく救護対策について協議を重ねてまいりました。

医師の派遣も初期には外科系医師を、次いで内科系医師を送っています。また、病院においての被災者に対する心理相談の受付も行っており、児童精神相談には精神科医師の派遣を計画しています。今回の震災では、電気・ガス・水道などのライフラインの途絶や、道路・鉄道などの交通網および通信網の遮断がおり、今後の初動救護の在り方や、医療活動の指揮命令系統の確率および効率的な救護活動などに多くの貴重な教訓が残されました。

また、災害救護活動を通じて、赤十字の救護活動が如何に国民から期待され、信頼されているかを知ることが出来ました。

各種の医療団体および医師会等と共同して実りのある災害救護を行っていかねばなりません。

災害救護活動に関しての職員の皆さんのご意見をお聞きし、今後の救護活動に備えたいと存じます。」と結んでいます。

赤十字の使命を項目として挙げると、この度のような災害救護、巡回診療と検診活動・一般診療、そして明治以来続けられている看護婦養成の一連の諸活動であり、当院図書室

職員もこの主旨に基づいて救護活動対象職員の一員として参加いたしました。

当院図書室は、閲覧室の一部木製の本棚や書庫のスタックから床の上に製本誌などが散乱しましたが、スタックなどの倒壊、設備の破損は見られませんでした。散乱した書物などの整理復旧は、担当職員の手で行われ、文

献の相互貸借活動は支障なく続けることができました。

このような時局には、図書資料の分担収集・分担保存の理念が一局集中的でない効果を期待することができます。当院図書室でも、赤十字の使命を遂行するのに災害、救護に関連した資料の収集を再検討し、充実を図ることを思料し職員に期待しています。